

北条泰時の政治構想

長 又 高 夫

はじめに

近年私は『御成敗式目』の研究を進めているが、その編纂責任者でもあった北条泰時の思想に大変関心を抱いている。北条泰時については、周知の通り、上横手雅敬氏によって執筆された優れた評伝がある^①。しかし、それは紙幅の限られた啓蒙書であるが為に、残念ながら泰時の思想については十分に論じられていない。また、近年の研究の成果によって泰時執権期の政治の内実が明らかになってきた点もあるので、それを踏まえいま一度、北条泰時の思想については多角的に検討し直す必要がある様に思われる。そこでまず本稿では、泰時の政治構想について考えてみたい。

従来、泰時執権期には、評定衆の合議によって共和的な政治が行われており、それこそが「執権政治」の典型的なスタイルであったと理解されてきた。しかし上横手氏が、論文「鎌倉幕府と公家政権」において、北条氏が一貫して目指す所は独裁政治であり、「執権政治」は妥協の産物に過ぎなかったと評価されたことによって、執権政治⇨共和的という前提にも疑問の目が向けられるようになった。それによって杉橋喬夫説の如く、泰時執権期も実質的には独裁政治が行なわれていたのではないかという評価も生まれることとなった^②。しかしこの杉橋説は評定衆の選定方法

北条泰時の政治構想（長又）

（執権が選任する）や評定会議での結論が両執権に委ねられるという政策決定の手続きから導かれた仮説であり、立案から検討段階までを含めて泰時の政策が独善的であったのか否かを考察しているわけではない。もし仮に杉橋説の如く、「北条氏の独裁的な地位を被覆する為に」評定制度という合議システムが導入されたのだとしても、誰に對し、何のために被覆する必要があったのかという事を明らかにせねばならないであろう。

鎌倉幕府が鎌倉殿を首長とする政治組織である以上、泰時の目指した政治体制を論ずるのであれば、鎌倉殿と執権との關係をまず遡上に乗せ論議せねばならない。そこで本稿では、將軍家政所執事として政務を主導した祖父時政や父義時と、執権として幕政を取り仕切った泰時とは、その権力に違いがあったのかどうかをまず確認した上で、泰時が如何なる政治構想をもって幕政に臨んだのかという点を明らかにしてゆきたい。

一、承久の乱の意味

北条泰時が幕府政治を掌握することが出来たのは、彼が父義時と伯母政子によって敷かれたレールに乗ったからであつた。まずはその概略を示しておこう。

三代將軍実朝亡き後、京都より僅か二才の摂家將軍藤原頼經（幼名三寅丸）を迎えた幕府であつたが、頼經が幼少であつた為に將軍宣下はなされずに、頼朝の妻であり、前將軍の母である政子が、頼經の後見役として鎌倉殿の役割を担うこととなつた。しかし實質的に政務を執り行なつたのは政子を補佐した弟の義時であつた。このとき義時の嫡子、泰時は御家人を統制する侍所の別当に、泰時の異母弟重時は將軍の儀式を掌る小侍所の別当に就任しており、北条一門に権力が集中する体制が出来上がりつつあつた。

だが北条氏が幕政を掌握する体制を快く思わない後鳥羽院は、承久三（一二一九）年、義時追討命令を全国に下した（院の近習、北面・西面の武士、畿内近国守護をはじめとする在京御家人、檢非違使、院分国・院領の兵士等がこれに応じた）。この時に発せられた追討宣旨には、義時が幼少の將軍を傀儡として専横を極め、皇憲を蔑ろにする旨が明記されている。^④この報を受けた幕府は、直ちに遠江・信濃以東の東国十五箇国の武士達に動員令を発し、これらの兵をもって、泰時、朝時（泰時異母弟）等を大將軍として京へ攻め上らせた。この積極策が功を奏し幕府軍は京方の軍勢を撃破することに成功する。しかし朝廷に対し、弓をひくという行為は、さすがに関東の武士達をも戸惑わせた様で、出兵が決定するまでは慎重論を唱える者も多かった。公家方の史料をもとにした『承久記』『増鏡』『明恵上人伝記』などの書物はいずれも義時を皇室に対する過激論者とし、泰時を穩健論者としている。しかし、泰時が実際に出兵に消極的であったのかどうかは明らかにし得ない。泰時と親交のあった明恵上人の伝記である『明恵上人伝記』には、泰時は、執權就任後に撫民を第一とする公平無私な政治を行なうことで、自らの行動の正当性を内外に示そうとしたと記されている。^⑤南朝の正統性を主張した南北朝期の公卿北畠親房も、その著書『神皇正統記』の中で、陪臣の身でありながら北条一族が栄えたのは、泰時が徳政を心がけた結果であると評価している。^⑥結果として、承久の乱によって反北条氏勢力を一掃出来たことは、北条氏にとって幸いであった。^⑦しかも、この乱の戦後処置として没収した京方の貴族・武士達の所領三千余箇所と、多くの西国守護職を北条氏に与した東国御家人達に恩賞として付与することが出来たのである。また、仲恭天皇を廃位し、新帝（後堀河）を擁立したのをはじめ、後鳥羽・順徳・土御門の三上皇を流刑に処し、倒幕に関わった貴族、武士等もすべて嚴罰に処した。^⑧

承久の乱以後、幕府は皇位継承者の選定や摂関以下公卿の人事にまで介入する様になり、朝廷を監視下に置いた。

承久の乱によって北条義時がこの国の「国主」となったと日蓮が記しているのも、義時の持つ実質的な支配権を評価したものであった。

承久の乱の際に、幕府軍の総指揮官として入京した北条泰時と叔父の時房（義時弟）は、戦後処理のために六波羅探題として都にとどまった。

そして元仁元（一二二四）年に義時が急逝すると、その後継者として泰時が鎌倉に呼び戻される。しかし義時の後継者選びは難航した。なぜなら義時の後妻伊賀氏が、兄である政所執事の伊賀光宗と謀り、実力者の三浦義村をだきこんで我が子北条政村に義時の跡を継がせ、それとともに娘婿の貴族、一条実雅を將軍にしようと画策したからである。だが北条政子がこの企てを未然に防ぎ、泰時を義時の後継者（「軍営御後見」|| 鎌倉將軍の後見人）に指名する。政子亡き後、泰時が最も丁重に伯母政子に対する追善供養を行なったのも、このときの恩にこたえとしたものであるう。

一、執事と執権との相違

翌嘉祿元（一二二五）年に、その後ろ盾となっていた政子が死去すると、泰時は両執権制と「評定」制度を創出する。⁽¹²⁾ 幼い將軍頼経の後見役であった泰時であったが、独裁体制は執らずに、みづからは叔父時房と共に「理非決断」職である執権に就任し、十一人からなる評定衆を選任し、両執権と評定衆からなる「評定」會議を幕府の最高機関とした。幕政の重要事項は評定衆による評定會議で審議されたが、最終的な決断は両執権によって為されたのである。この年の末に頼経は、執権泰時を加冠役として七歳で元服するのであるが（さらに翌年頼経は將軍宣下を受け、正五位下

征夷大將軍兼右近衛少將に昇叙される)、父の跡を継いだ泰時が、まず考えねばならぬ眼前の課題は、間もなく元服する鎌倉將軍をどのように幕政に参与させるかということであった。その答えが右の政治改革であった。鎌倉殿が幼少の間は、その後見人が幕政を取り仕切ることも可能であろうが、鎌倉殿が元服し己の意思をもつようになれば、後見人との間に軋轢が生じてくることは間違いない。そこで聡明な泰時は、この課題を克服する為に、「執権—評定衆」制度を確立させ、鎌倉將軍の役割を変えようとしたのである。祖父時政や父義時の場合は、如何に権力を握ったとしても、それはあくまでも將軍家の「執事」⁽¹³⁾としての権力であり、鎌倉將軍の親裁をサポートするのが、その役割であった。⁽¹⁴⁾前述せる様に、幼少の頼経を鎌倉に迎えたときでも理非を聴断したのは、「尼將軍」「二位殿」と呼ばれた政子であり、義時は、政子の命を受けて「執事」「奉行」として政務を行なったに過ぎなかったのである(泰時も政子生存中は「執事」に過ぎなかった。⁽¹⁵⁾)

しかし泰時が創出した「執権」職は、鎌倉將軍に代わり、政務に関する重要案件を決裁する権限を有するものであった。⁽¹⁶⁾(鎌倉時代末期に編纂された『沙汰末練書』には「執権トハ、政務ノ御代官ナリ」とある。⁽¹⁷⁾勿論、重要な案件は「評定衆」による審議を経て結論が出されるのであるが、両執権が評定會議を主催し、その最終的な判断も両執権に委ねられていたことから考えれば、権力の所在は明らかであろう。したがって、杉橋説の如く、泰時が、評定衆を置き、執権を二人としたのも、実権が泰時にあることをカモフラージュする為の策であったと評価する事も可能ではある。だが、権力の所在をカモフラージュするといった消極的な評価が果たして妥当なのであるうか。執権泰時が実権を掌握していた事は幕府内において周知の事実であり、もし仮に泰時がその事を表面化しない様に画策したのであれば、誰に対して如何なる目的で「被覆」せねばならなかったのであろうか。

評定衆は、実務能力を有した御家人（杉橋氏は「文筆官僚」と表現されている）を主たる構成メンバーとしており、「豪族の領主層の代表者とおぼしき者」が少なかつたことから、評定会議を執権の政治判断に合理性を付与する諮問機関であつたと杉橋氏は評するのであるが、この構成メンバーはむしろ評定衆が単なる名誉職ではなかつたことを意味するのではないだろうか。文暦二（二三五）年五月に評定衆となつた結城朝光が、就任後、わずか一箇月ばかりで、重任に堪えずとして評定衆を辞している事はその事を如実に示す様に思われる（『吾妻鏡』文暦二年閏六月三日条）。また評定の公正さを担保する手段として、評定の席での発言の順番が毎回籤で決せられていた事も看過出来ない。¹⁹⁾

幕府評定制度成立後まもなく幕府の裁判規範として制定され、諸国に頒布された御成敗式目には、その末尾に評定衆十一名と両執権による起請文が附されていた。その文には、評定会議の際には、評定衆一人一人が当該規範に基づき誰に憚ることなく公正に意見を申すこと、また、もし審議を経た最終的な結論がたとい「非処」であつたとしても、評定衆全員で責任を負う事などが明記されていた。重要事案に関しては、両執権と評定衆十一名とが審議をつくした上で、両執権が判断を下し、その結果が「評定事書」として鎌倉殿に上申される、というのが原則であつたはずである。²⁰⁾勿論、結論を下すのが執権であつた以上、評定会議を開くことや鎌倉殿へ上申することは形式に過ぎないと評価するむきもあろう。しかし評定衆の意見をとりまとめ、主君たる鎌倉殿に最終判断を仰ぐ事こそが、執権本来の役割であつたと思われる。²¹⁾

三、鎌倉殿と執権との関係

源家三代將軍ならびに二位殿の親裁下では、必要に応じてメンバーを変えながら、將軍もしくは二位殿臨席の上で

合議がなされ、將軍もしくは二位殿が最終的な判断を下す事が一般的であった²²⁾。しかし、新たな「執権」体制下では、鎌倉將軍は「評定」會議から締め出され、執権と評定衆だけで事が決せられた²³⁾。將軍に対しては、評定會議における決定事項が評定事書として報告されるだけであった。叙上の幕政改革は、幕府発給文書の形式の変化にも現れている。これまでは幕府は下文を正式な文書として用いていた。たとえば源頼朝の代の下文は、奥上署判下文↓袖判下文↓(前右大將家・將軍家)政所下文の順に形式が変化し、頼家・実朝の代には、政所開設資格を持たない三位叙位以前には袖判下文を用い、三位に叙位されて政所の開設資格を得た後は將軍家政所下文を用いてきた²⁴⁾。しかし、建仁三(一二〇三)年將軍頼家を幽閉し、弟実朝を新將軍に擁立した上で北条時政が將軍の職務を代行した時期と、承久三(一二二二)年將軍実朝が暗殺されるという非常事態のもと幼少の藤原頼経を次期將軍として鎌倉に迎え、北条政子―義時体制が敷かれた時期には、將軍家の「執事」たる北条氏を単独奉者とする奉書様式の下知状を特別に用いてきた(前者は時政を、後者は義時を奉者とする)²⁵⁾。したがって下知状の発生は、北条氏の政治的な地位の上昇と密接に関係している様であるが、元久二(一二〇五)年に北条時政が失脚してから承元三(一二〇九)年に將軍家政所が設置されるまでの数年間は(つまり実朝が三位に叙されるまで)、実朝の近臣五人が連署する下知状が発給されているので(署判者に義時は含まれない)、近藤成一氏が指摘される様に「下知状を北条氏の奪権手段とのみ考えることは出来ない」であろう²⁶⁾。したがって、何か特別な事情があって下文が発給出来ないときに、下文の「略式」文書²⁷⁾あるいは「代用物」²⁸⁾として、これまでは下知状が用いられてきたという事実をここでは取り敢えず確認しておきたい。

ところが執権体制が整う嘉禄二(一二三二)年以降、下文と下知状とが併用されるようになる²⁹⁾。具体的には、所職の恩給と讓与の安堵には下文が、訴訟の裁許、守護不入等の特権付与、紛失安堵等には下知状が用いられる様になる

のである。これを換言すると、佐藤氏が指摘された様に、「將軍が御家人に対してもつところの身分的、主従制的支配権の発動」には下文が、「將軍が領域的支配者としてもつ所の統治権的機能の発動」には下知状が用いられたといふことになる。³⁰ 鎌倉殿が実質的に政務から遠ざけられた嘉祿二（一二三六）年の幕政改革と、上述の文書様式の変化が、軌を一にするものであったことから考えれば、鎌倉殿の実権が失われたことによって、下文の使用が制限されたと理解されよう。下文を中心とするこれまでの文書体系は、嘉祿元（一二三五）年を境にして、下知状を中心とする文書体系に改められたのである。下知状も、下文も両者共に文面には「鎌倉殿」の仰せを奉ずる旨が記されているが、実際に鎌倉殿の主體的な判断に基づき、その家司が発給しているのは下文だけであった。下知状の場合は、執権二人の判断で署判を加え（連署が置かれず執権が一人の場合は単独署判で）、発給しているのである。³¹ したがって執権への権力の集中がこのような文書様式の変化を生み出したと考えられる。それではなぜ、所領の宛行と安堵に限り、下知状ではなく、従来通り下文が用いられたのであろうか。それは所領の宛行や安堵が、鎌倉殿と御家人達との主従関係（主従契約）を確認することに直結したからであると思われる。つまり鎌倉殿の「身分的、主従制的支配権」には、執権と雖も介入しないことを示す意味があったのではないだろうか。³² ただし、執権が行なう事となった「理非決断」も、所領の宛行や安堵と同様、本来は鎌倉殿の親裁事項であり、その権限行使を制限することは容易に出来なかったはずである（そのことは、たとい形式に過ぎないとはいえ、下知状の書止文言に「依仰下知如件」と記されていることから窺えよう）。仮に鎌倉殿の後見役と雖も、そのような事を強引にやったならば、御家人達から反感を買うことは間違いない、そこで泰時は、「執権―評定衆」体制という共和的な政治体制を導入するときを見計らって、新設された執権への権限委任を鎌倉殿に求め、それを認めさせているのである。政局の安定が求められている時期に鎌倉殿がまだ七歳

であったことは、御家人達に危機感を募らせ、幕府内は執権を中心とする新体制の導入に同調せざるを得ない空気となっていたのであろう。

執権職の創設に尽力した泰時であったが、武家政権の首長としての鎌倉殿の權威なくして武家政権を存続させることが出来ない事は彼もよく理解していた。執権が如何に権力を握ろうとも、鎌倉殿あつての執権であり、その逆でないことを泰時は誰よりも認識していたはずである。³³ そのことは後述せる泰時の政策を見れば自ずと明らかになる。幼少の鎌倉殿を政務から遠ざけた泰時であったが、決して鎌倉殿を軽んずることはせずに、むしろ鎌倉殿の權威を高める為の努力を怠らなかったのである。

四、鎌倉幕府体制の樹立

前述せる様に、承久の乱の勝利により、京方の貴族・武士達の所領三千余箇所を没収した幕府は、戦功の恩賞として東国の御家人達を当該所領の新地頭に任命していった。新地頭への任命は鎌倉殿からの新恩給与であったのである（勿論その際には下文が用いられた）。この結果、全国的に地頭制度が実施されるようになり、「先に頼朝が意図して成功しなかったことが、ここに実現して、鎌倉幕府ははじめて実質的にも全国的政権となった」³⁵のである。これによって御家人達の主君であり、日本国総地頭・日本国総守護である鎌倉殿の社会的役割は一層重要性を増したといつてよい。しかし実際のところ幕政を主導していたのは北条氏であり、幼少の鎌倉殿は形式上の首長にすぎなかったという所に問題があった。執権職を新たに設け実権を掌握した泰時であったが、鎌倉幕府体制を堅固なものとする為には、どうしても武家政権の首長としての鎌倉殿の權威を高めておく必要があったのである。

たとえば、將軍の新御所の設営と、それにともなう都市機能の整備・拡張は、鎌倉を將軍の主都として相應しい都市に再生させようとするものであった。父義時のときから計画は練られていたのであるが、嘉禄元（一二三二）年大倉御所から宇都宮辻子御所へ移転した。これにともない、新御所に面した鶴岡八幡宮から由比ヶ浜に向かう若宮大路（最大道幅三十三メートル）がメインストリートになった。この若宮大路は、將軍を中心に武家が儀式を執り行なうハレの場であり、京の朱雀大路と同じ役割を担った。⁽³⁶⁾ また都市化を進める為に帝都平安京にない「保」制を敷き、⁽³⁷⁾ 平城京・平安京で採用されていた家地の単位である「丈尺」制や地割面積の単位である「戸主」制を導入した。⁽³⁸⁾ さらに鎌倉への交通網の整備も行われている。切り通しなどの開削により幹線道路が整備され、海路により鎌倉へ物資を搬入する為に港湾（人工の築島⁽³⁹⁾ 和賀江島）も新たに築造された。⁽⁴⁰⁾

また、鎌倉殿が新御所へ移転したのにもない、鎌倉大番役が関東十五箇国の御家人役として新たに課される様になったことも注目される。⁽⁴¹⁾ 西国御家人達には従来通り、平安京の内裏・院御所諸門の警固にあたる京都大番役が課されたのであるが、東国御家人達には輪番で鎌倉殿御所の西侍に詰め、御所内部や御所諸門を警固することが義務付けられたのである。⁽⁴²⁾ これが鎌倉殿の權威を高めんが為の施策であることは疑いない。

承久元（一二一九）年に頼経が鎌倉へ下向してきた際にも、義時が泰時の弟重時を別当に任じて小侍所を新設し、宿待を行なう体制を整えていたのだが（『吾妻鏡』承久元年七月二十八日条）、当初は鎌倉殿に近侍する御家人が御所東小侍に詰めていただけであった。しかし嘉禄元年に新御所へ移転すると、西侍に関東十五箇国の御家人を結番勤仕させ、東小侍には「可然人々」を祇候させるといふ、所謂鎌倉大番役の制度を開始した。京都大番役も同様であるが、「大番役」は、軍役として御家人の統制機関である侍所の統括する所であった。当時の侍所別当が執權泰時の兼務す

る所であったことから考えれば、鎌倉大番役の制度化も泰時の発意であった可能性が高い。將軍御所諸門の警固は侍所の職掌であつたらしいが、御所内の警護は小侍所の管掌であつた。小侍所は承久元年の頼経下向の際に、泰時の父義時によって新設された役所であり、將軍御所への宿営や將軍出行の際の供奉等を管掌するという侍所の職務を特化させる為に、侍所から分立されたものであつた。泰時の弟重時が小侍所の初代別当に任ぜられたが、鎌倉殿の動向、特に北条氏以外の御家人との接触を監視する事こそが真の目的であつたはずである。小侍所には諸事芸能に堪うるものを詰めさせたが、川添昭二氏が既に指摘されている如く、これは鎌倉殿を学問・文芸の世界に閉じ込めることで、政治から遠ざける狙いがあつたと思われる。⁽⁴⁴⁾ 嘉祿元（一二二五）年に開始された鎌倉大番役は、東国御家人達に鎌倉殿への直接的奉公を行なわしめるもので、武家の棟梁としての鎌倉殿の立場を御家人達に再認識させる狙いがあつたと思われるが、それが泰時と小侍所別当重時両者の監督下で行われていたという点に着目しておきたい。

また鎌倉殿の威容を整える為に、鎌倉殿に関わる儀式が整備されたのもこの頃であつた。天皇の「浄」・「聖」を守る為に平安京で行われていた四角四堺祭⁽⁴⁵⁾・七瀬祓⁽⁴⁶⁾が武家の都鎌倉でも行われる様になつたのである。⁽⁴⁷⁾ ただし、鎌倉での四角四堺祭は、將軍御所の四隅と鎌倉の四つの境界で行われているように、鎌倉の主である鎌倉殿の「浄」と「聖」を守る為に執り行われたのだつた。この時期にこれらの祭りが導入されたのもやはり、鎌倉殿の社会的地位を高めようとする一連の動きと連動するものと思われる。当該期に新御所と若宮大路という新たな祭祀空間が生まれ、それにともない鎌倉殿を中心とする武家儀礼も整えられていったのである。

それでは執權泰時自身の鎌倉殿への態度はいかなるものであつたのであろうか。執權泰時自身も、御所東小侍に宿待していた事を『吾妻鏡』は伝えるが（『吾妻鏡』安貞三年正月十三日条）、『同書』貞永元（一二三二）年十一月二十八日

北条泰時の政治構想（長又）

条には、泰時自らが当番として宿直した際に、付き添った家臣が泰時の為に筵を持参したのを見て、東小侍に詰めている御家人達に聞こえる様に、板の間で控えるのが臣下として当然の礼であると泰時がこの従臣を叱責したことを美談として記している。また翌十一月二十九日条には、泰時と評定衆の一人である後藤基綱との間で交わされた次の様な連歌が載せられている。

あめのしたにふればぞ雪の色もみる

泰時

みかさの山をたのむかげとて

基綱

鎌倉殿が催した永福寺での雪見の和歌会が雨により中止となった。その帰路、後藤基綱が中止を口惜しがり、それを耳にした泰時が基綱との間で取り交わしたのが右の連歌であった。「鎌倉殿のおかげで天下が治まっているからこそ、雪見などが出来るのである」と泰時が歌ったのを受けて、後藤基綱が「天下の御笠である近衛中将（48）鎌倉殿のおかげですね」と唱和したのである。右の『吾妻鏡』の両記事は史実を伝えたものであろう。公の場において泰時は、他の御家人達の手本となる様に、鎌倉殿に対して臣下の礼を尽くしたものと思われる。泰時が御所における祭祀や儀式を整えたのも、君臣関係を視覚化し、礼による秩序を作りだそうとしたのであろう。

おわりに―泰時の目指した政治体制とは如何なるものか―

必ずしも執権（49）將軍家政所別当ではなかったが、貞永元（一二三二）年の將軍家政所開設時に、初代執権の二人が共にその別当（長官）に任ぜられているのは、執権職と政所別当職との密接な関係を示すものであろう。鎌倉殿と評定衆との橋渡しを行なうのが執権の役割であったとするならば、鎌倉殿の家政機関の長官（政所別当）こそが執権に

相応しいと言うことができよう。鎌倉殿が行なうべき政務を一部代行するポストとして執権職が創設されたという、その歴史的な意味をやはり確認しておく必要がある。泰時は単なる將軍家の「執事」から実権を握る「執権」へと転身をとげたのである⁵¹⁾。

自らが執権となり、幼少の鎌倉殿を政務から遠ざけた泰時であったが、決して鎌倉殿をぞんざいに扱うことはなく、主君としてより立てて、これまで以上に武家の首長としての権威を高める様に務めたのである。『吾妻鏡』貞永二(一二三三)年正月十三日条には、頼朝の御忌月に当たるとして頼朝の法華堂にやってきた泰時が、堂上に登らず堂下に敷皮を布いて座し念誦した事を記しているが、このエピソードからも泰時の謙虚な姿勢を垣間見ることができよう。このとき頼朝法華堂の別当尊範が堂に上る様に頻りに促すと、泰時は「御在世ノトキ、左右ナク堂上ニ参ラズ、薨後の今、ナンゾ礼を忘レンヤ」と述べたと『吾妻鏡』は伝えている。自らの烏帽子親でもある頼朝に対して特に敬愛の念が強かったのかもしれないが、最高権力者でありながら堂下で念誦する姿勢は、自らが頼朝の御所に宿直する際に、板の間に直接座し控えるのが臣下の礼であると述べそれを実践した泰時の態度とも共通するものがある。泰時は鎌倉殿に対する忠義の大切さを御家人達に説き、自らもそれを実践したのである。泰時は鎌倉殿(頼朝)を政務から遠ざけて、評定会議には臨席させなかったけれども、毎度その結果を評定事書として鎌倉殿に報告している。形式的とはいえ鎌倉殿に裁可を仰ぐという事にやはり泰時は重きを置いていたのであろう。

しかし、泰時の後を襲い執権に就任した経時は、泰時の様には鎌倉殿へ敬意を払わなかった。執権に就任した翌寛元々(一二四三)年九月、訴訟に関しては一々鎌倉殿に裁可を仰いでいては政務が滞るとして、執権が下した判決のままに奉行人が下知状を作成する様、問注所執事に命じている(追加法二二三条⁵²⁾)。そして経時は翌二年四月にわずか

六歳の藤原頼経の子頼嗣をみずからが烏帽子親となつて元服させると（『吾妻鏡』寛元二年四月二十一日条）、壮年の頼経に強要して幼少の頼嗣に將軍職を譲らせている。また翌三年七月十三日には経時は自らの病氣平癒の祈禱の為に自邸に幕府の陰陽師を呼び寄せ四角四方祭を行なわせている（『吾妻鏡』同日条）。前述せるように四角四方祭は、もともと天皇、あるいはそれに準ずる人々に関わる特別な祭祀であつたのだが、承久の乱以後、関東においても鎌倉殿の權威を高める為に行なわれていた。その特別な祭祀を執権が自らのために自邸で行わしめたという事実は、執権経時が權勢を誇つていた事を窺わせる。かくの如く経時の代に生じた鎌倉殿と執権との確執は、やがて時頼執権期に北条一門名越光時による反乱や、三浦氏による宝治の乱を惹起させた。この二つの乱は、退位後も鎌倉に留まり隠然たる勢力を培つていた藤原頼経と氣脈を通ずる有力御家人達によつて起こされた執権に対する反乱であつた。これらを鎮圧したことにより結果的には執権政治は安定したのであるが、一步誤れば北条嫡宗家が没落し執権政治体制自体が瓦解する可能性もあつたのである。泰時は、頼経を政務からは遠ざけはしたが、その反面、関東の主、御家人達の主君として頼経を祭り上げ、そのプライドを傷つけるような事はしなかつた。執権政治体制は鎌倉殿と執権との良好な主従關係を前提することを泰時はよく認識していたのであらう。御家人達に忠義の心を持つように訴え、自らそれを実践したのもその故であらう。

また、執権を中心とする幕府体制を築き上げようとする泰時が、執権の定員を敢えて二名としたのもやはり泰時の政治判断によるものであつたに違ひない。泰時は、今後の幕政の事も考慮し、頂点に立つ執権を二人とすること相互に自専を戒めさせようとしたのではないだらうか。⁵³ 泰時は、叔父時房をもう一人の執権とするが、泰時はこの叔父を執権としても、政所別当としても自らの上位に位置付け、⁵⁴ 儀式の際にも、この叔父を上席に据えて悌順の心を示し

ている⁽³⁵⁾

「執権—評定」制度は、承久の乱後、実質的に全国政權となった幕府が政務を迅速に処理する為に創出したものであった。なぜ、これまでの鎌倉殿主導の政治から、執権主導の政治に移行させることが出来たのかと言えば、それは承久の乱という武家政權存続の危機があったからに違いない。泰時の伯母である政子が、承久の乱の出兵に際し、御家人達を集め、その結束を促した様に（『吾妻鏡』承久三年五月十九日条）、新たな時代の幕開けを前に泰時も御家人達がイニシアチブをとる新たな政治体制の採用を訴えたのであろう。伯母政子が愛読した治道規範の書『貞觀政要』には、「乱後の治め易きこと、なほ飢人の食し易きがことなり」という一文があるが、泰時はこの道理をよく弁えていたのかもしれない。御家人達が自分達の手で強固な武家政權を創出せねばならないと自覚していた所に、リーダーシップを発揮する泰時が登場し、その彼が実力、人格ともに人より秀でていたからこそ「執権—評定」制度を創出することが出来たのではないだろうか。泰時が儒教的な徳治政治を標榜し、自ら公正、無欲な態度で政務に臨んだのも執権を中心とする新たな政治体制を軌道に乗せねばならないという、彼なりの使命感があったからではないだろうか。そして時を置かずして評定会議の裁判規範ともいうべ貞永式目を制定したことも、客観的な道理にもとづいて政務が処理されている事を内外に示す意味があったのであろう。

泰時は、藤原定歌の新勅撰和歌集にも収められている次の歌を詠んでいる（『新編国歌大観 第一巻勅撰集編』歌集『二八二頁』）。

世の中に麻はあとなりけり心のままのよもぎのみして

これは、『荀子』勸学篇の「蓬も麻中に生えれば扶けずして直く」という一節を受けたものである。つまり、曲が

りくねってのびる「蓬」^{よもぎ}（つる草）も、まっすぐに伸びる麻の中に育てば、まっすぐに育つものであるという一節を受けて、今の世は、まっすぐな心持の人がいなくなった為に、性質の劣った人ばかりになってしまった、と嘆いた歌である。

泰時が『荀子』を読んでいたことが、右の歌からも知ることが出来る。性悪説で知られる荀子であるが、彼は、社会的な立場で善悪を考え、「正理平治」（たたく治まること）こそが善であると主張した思想家であった。⁵⁶荀子は、「礼」と「刑」を用いて人々に己の分を弁えさせ、それによって社会を秩序づけてゆくことの重要性を説いたのだが、⁵⁷北条泰時はこの荀子の思想に共感を覚えていたのではないだろうか。⁵⁸

南朝の忠臣で賢才として知られる北畠親房が著した歴史書『神皇正統記』のなかで、もし頼朝と泰時の二人がいなければこの日本国はどうなっていたかわからないと泰時の治政を称賛したその意味を我々はもう一度考えてみる必要があるであろう。⁵⁹

注

（1）上横手雅敬氏『（人物叢書）北条泰時』（吉川弘文館、昭和33年）。

（2）上横手雅敬氏「鎌倉幕府と公家政權」（初出昭和50年、のち『鎌倉時代政治史研究』吉川弘文館、平成3年）。

（3）杉橋喬夫氏「執権・連署制の起源—鎌倉執権政治の成立過程・統論—」（初出昭和55年、のち『日本古文書学論集5中世I』吉川弘文館、昭和61年、一四五頁）には次の様に記されている。

時政の時代を含めて執権政治をふり返してみると、十三人合議制をはじめ、いわゆる合議的政治形態は、いずれも前体制が崩壊した動揺期に、対蹠的・過渡的に出現する事実が確認される。むしろ独裁・専制志向こそが成立期執権政治の

基調となっていたとしなければならない。泰時が創設した評定衆を、過渡的とするには存続期間の点で微妙だが、この制度は、真の意味での合議政治運営機関とはいえないし、かえって北条氏の独裁的な地位を被覆する役割を期待されたと考えてさし支えない。(副) 執権時房の地位も泰時と対等とはいえなかった。最近では、得宗専制政治の開始を時頼の時代にまで遡らせる見解も見られるだけに(上横手「鎌倉幕府と公家政權」〈新『岩波講座日本歴史5 中世II』〉、ますます合議制を執権政治の基軸に据ええないのである)。

(4) 実例としては、「承久三年五月十五日付官宣旨案」(『鎌倉遺文』古文書編第五卷、二七四六号)がある。

(5) 平泉洗沢注『明恵上人伝記』(講談社学術文庫、一九八〇年)二六六頁～二七九頁。

(6) 『神皇正統記』「後嵯峨」条には次の様に記されている(岩波日本古典文学大系『神皇正統記・増鏡』、一九六五年、一六二頁)。

大方泰時心タビシク政スナヲニシテ、人ヲハゲクミ物ニオゴラズ、公家ノ御コトヲモクシ、本所ノワツラヒヲトビメシカバ、風ノ前ニ塵ナクシテ、天ノ下スナハチシヅマリキ。カクテ年代ヲカサネシコト、ヒトヘニ泰時ガ力トゾ申伝スル。陪臣トシテ久シク權ヲトルコトハ和漢兩朝ニ先例ナシ。其主タリシ頼朝スラニ世ヲバスキズ。義時イカナル果報ニカ、ハカラザル家業ヲハジメテ、兵馬ノ權ヲトレリシ、タメシマレナルコトニヤ。サレドコトナル才徳ハキコエズ。マタ大名ノ下ニホコル心ヤ有ケン、中ニトセバカリゾアリシ、身マカリシカド、彼泰時アイヒツギテ徳政ヲサキトシ、法式ヲカタクス。己ガ分ヲハカルノミナラズ、親族ナラビニアラル武士マデモイマシメテ、高官位ヲノゾム者ナカリキ。其政次第ノママニオトロヘ、ツキニ滅ヌルハ天命ノヲハルスカタナリ。七代マデタモテルコソ彼ガ余薫ナレバ、恨トコロナシト云ツベシ。

(7) 承久の乱の際に、倒幕に立ち上がった者のなかに、源氏將軍の縁故者や関係者、北条氏により排除された御家人達の殘党が多く含まれていたことを石井進氏は指摘されている(同氏『日本の歴史7、鎌倉幕府』新装版中公文庫、二〇〇四年〈初出一九七四年〉)。

(8) 後鳥羽・順徳、土御門三上皇と後鳥羽の皇子である六条宮、冷泉宮等は、そろって流罪となり、踐祚したばかりの幼い仲恭天皇(順徳の皇子)も廢位され、後鳥羽上皇の兄行助親王の子が新たに皇位についた(後堀河天皇)。また京方に加わった貴族や武士達は、殆ど極刑となった。

北条泰時の政治構想(長又)

北条泰時の政治構想（長又）

- (9) 建治三年六月日付下山兵庫五郎宛書状（所謂「下山御消息」）には「日本国の万民等、禪宗・念仏宗の悪法を信仰を用し故に、天下第一先代未聞の下克上出来せり。而に相州（北条義時）は謗法の人ならぬ上、文武きはめ尽せし人なれば、天許し国主となす。随て世且く静なりき」とある（『昭和定本日蓮聖人遺文』第二卷、身延山久遠寺、平成12年、一三二九頁）。この書状は日蓮聖人が弟子因幡房日永に代わって筆をとり、日永の父下山光基に提出した弁明書と言われている。
- (10) 六波羅探題は、承久の乱後に幕府が六波羅においた出先機関の長官を示す言葉として一般的に用いられているので本稿でも使用したが、鎌倉期の史料上に「六波羅探題」と記されたものはなく、「六波羅（殿）」「六波羅守護」「六波羅管領」と記されていた。六波羅探題の呼称については熊谷隆之氏「六波羅探題考」（『史学雑誌』第113編第7号）を参照されたい。
- (11) 上横手雅敬氏『（人物叢書）北条泰時』（前掲）一五三頁。ただし執権政治の開始期については諸説見解が分かれている。泰時の祖父時政を初代執権とする上横手雅敬氏や石井進氏の説（上横手雅敬氏『日本中世政治史研究』、石井進氏『日本の歴史7 鎌倉幕府』、泰時の父義時を初代執権とする佐藤進一説（『世界歴史事典』「執権政治」の項）等がある。だが承久の乱後に執権政治が確立されるという点では共通の認識をもっておられる様である。おそらく『吾妻鏡』が時政や義時をも「執権」として表現していることが、諸説を生むことになったのであろう（『吾妻鏡』は鎌倉後期の編纂物である）。しかし、評定衆あつての執権であると考えるので、私は初代執権を泰時と考える（注(14)も参照されたい）。なお五味文彦氏も初代執権を泰時と考えている（『吾妻鏡の方法——事実と神話にみる中世』吉川弘文館、平成2年）。しかし、
- (12) 上横手雅敬氏『日本中世政治史研究』（塙書房、昭和45年）三八七頁。
- (13) ここでの「執事」は、政所執事という職名を指しているわけではない。「主人の近くに侍して、家政をもっぱらとり行なう者」（小学館『日本国語大辞典』）という意味である。五味文彦氏が紹介された史料（『中世法制史料集 第一卷鎌倉幕府法』（岩波書店、一九五五年、三七四頁（参考資料九九））に、時政、義時が政所別当として行なった沙汰を「執事御方御下知」と表現しているのがこの用例である（五味文彦氏「執事・執権・得宗」『前掲書』二〇一頁）。なお本稿で用いた「執事」は、いずれもこの意味で用いている。
- (14) 五味文彦氏は、「執事」体制から「執権」制への推移を次の様に述べておられる（同氏『吾妻鏡の方法——事実と神話にみる中世』吉川弘文館、平成2年、二〇九頁）。
- 將軍の親裁体制の時期においては、政所が重要な機構として位置を占め、時政や義時はそこでは後見・執事として將軍

を補佐していたのであった。ところが泰時の代にいたると、それが大きく変わる。後見の執事から理非決断の職の執権への転換である。泰時は、理非決断職を將軍から奪ひ執権の権限を確立させたのである。

- (15) 仁平義孝氏は、実朝没後、北条義時はその地位を向上させて、評議を主導し、政子を補佐するようになったと指摘されている(仁平義孝氏「鎌倉前期幕府政治の特質」『古文書研究』第31号、一九八九年)。

- (16) 従来、將軍家の政所別当の内の一人が執権に任命されると理解されてきた(たとえば杉橋喬夫氏「鎌倉執権政治の成立過程——十三人合議制と北条時政の「執権」職就任——」『御家人制の研究』)。しかし、政所別当の構成を調べた毛利一憲氏は、執権が必ずしも主席別当ではなかったこと、また將軍がいまだ三位に達せず政所が開設されていないときにも執権の存在を認めることが出来ることなどから、執権を政所別当と切り離して考えるべきであると主張された。毛利氏は、幕府執権の職掌、即ち①審理機関を主導する。②上裁を仰いで決定を見た後は自ら文書の発行にあたる、などといった職掌が記録所の執権と共通点を見出せるとした上で、これを執権職の特徴と考え、泰時の祖父時政も、十三人合議制の中で自らを奉者として下知状を発行していることから時政を初代執権と考えるべきであると指摘された(同氏「鎌倉幕府執権の職制について——記録所執権と幕府政所別当の考察を通じて——」『北見大学論集』第9号)。しかしこの推論はいささか乱暴な様に思われる。時政が下知状の奉者となつたのは、頼家を將軍職から退かせた非常時のことであり、しかも当時、十三人合議制が機能していたかどうかはわからない。執権を政所別当と切り離して考えるべきであるという主張や合議機関あつての執権であるという毛利氏の主張には賛同しうが、初代執権を時政とする点には従いかねる。

- (17) 『中世法制史料集』第二卷室町幕府法(岩波書店、一九五七年、三六〇頁)。

- (18) 杉橋氏は「鎌倉執権政治の成立過程」(前掲)において「評定衆十一名中八名まで文筆官僚によって占められ、豪族の領主層の代表者とおおしき者は、わずかに三浦・中条・後藤の三氏に過ぎない」と述べられている。

- (19) 「幕府の評定においては、年令順か、逆に年令の若い方からかの二様として、前者を老、後者を若と名付けて、老若二つの籤を用意し、評定會議に先立って籤役が老若の何れかを決定するという方式がとられた。もし常時若年の方から発言させるとした場合に予想される事前の協議を防ぐ趣旨で、このような籤方式がとられたのであろう」(佐藤進一氏『日本の中世国家』岩波書店、一九八三年、一一八頁)。

- (20) その事は、寛元元(一二四三)年九月二十五日付の追加法二二三条から窺うことが出来る。

- (21) この点に関し注目されるのは、後嵯峨院政期の院評定制に対する美川圭氏の評価である。美川氏の評価は従来の評価と異なるものであった。後嵯峨院政期に朝廷に初めて導入された院評定制の意味に関しては、従来、公卿の議定に独立性を与え、院の専制を抑制することになったとする橋本義彦説が支持されてきた（橋本義彦氏「院評定制について」『平安貴族社会の研究』吉川弘文館、一九七六年）。しかし美川氏は、橋本氏の評価とは全く反対に、後嵯峨院政期に院評定制が成立したのは、みづからが擁立した後嵯峨の院政を強化せんとする幕府側の思惑があったと評価されたのである。美川氏は、後嵯峨が北条氏によって擁立された人物であった以上、「北条氏が公卿（評定衆）の合議によって、後嵯峨の権力を掣肘させようとしたはずはなく、むしろ合議によってその権力あるいは権威の上昇をはかっていたと考えるべきであろう」と指摘されている（同氏「建武政権の前提としての公卿合議——合議と専制」論をめぐって——『日本国家の史的特質 古代・中世』思文閣出版、一九九七年、六一〇頁）。また美川氏は、同論文の中で、杉橋氏の泰時期の幕府評定制に対する前掲の評価を首肯した上で、『専制』の有無は、『合議』の有無とアブリオリなのではなく、それが真の意味での『合議』がどうかを含んで、その『合議』自体のありかたに規定されていると考えるべきであろう」とも述べられている（『前掲書』六一八頁）。合議の有無から、専制の有無を判断することは出来ないとする氏の指摘は従うべきものであるが、美川氏も指摘される通り、合議自体のあり方を具体的に検討することこそが専制の有無を判断する為には必要なのである。泰時の政務の進め方を見る限り、やはり彼が専制を志向したとは思えないのである。
- (22) 仁平義孝氏は、次の様に指摘されている（同氏「鎌倉前期幕府政治の特質」『前掲誌』、四六頁）。
- 將軍頼家・実朝期の幕府政治は、大江・三善・二階堂氏といった幕府奉行人と北条氏とからなる合議機関において案件が審議され、將軍が最終判断を下すという方式で運営されていた。北条氏は合議機関の一構成員でしかなく、いまだ幕政の主導権を握っていない。しかし、実朝の死を契機に、義時は他の奉行人の一ランク上に位置する存在となり、合議機関の主導権を握るに至った。合議による政治運営と、実朝の死を契機とした北条氏による合議機関の主導権掌握、この二点が鎌倉前期幕府政治の特質といえよう。
- (23) 仁平義孝氏は、泰時以降、將軍は評定会議に参加しなくなるが、それまでは將軍邸内で合議評定が開かれるのが一般的であったと指摘されている（同氏「執権政治期の幕政運営について」『国立歴史民俗博物館研究報告』第45集、平成4年）。

(24) 日本歴史学会編『概説古文書学 古代・中世編』（吉川弘文館、昭和58年）七十一頁。ただし「建長四年四月、將軍藤原頼嗣が廃され、宗尊親王が宮將軍となってからは最初から將軍家下文がだされ、袖判下文が用いられることはなかった」という。

(25) 下知状は「依鎌倉殿仰。下知如件」という書止文言を有した。

(26) 近藤成一氏「文書様式にみる鎌倉幕府権力の転回―下文の変質―」（初出一九五六年、のち『日本古文書学論集5 中世I』所載、昭和61年、一六八頁）。

(27) 佐藤進一氏「中世史料論」（初出一九七六年、のち『日本中世史論集』岩波書店、一九九〇年、二九八頁）。

(28) 近藤成一氏「文書様式にみる鎌倉幕府権力の転回―下文の変質―」（『前掲書』一六九頁）。

(29) 佐藤進一氏「中世史料論」（『前掲書』二九八頁）。佐藤氏は下文と下知状の併用を「承久の乱以降」と漠然と表現していた

が（同氏『古文書学入門』法政大学出版会、一九七一年、一二八頁）、近藤成一氏は、その時期を嘉祿二年以降と厳密に述べておられる（同氏「文書様式にみる鎌倉幕府権力の転回―下文の変質―」。『前掲書』170頁）。また毛利一憲氏も近藤説と同様の指摘をされている（鎌倉幕府執権の職制について―記録所執権と幕府政所別当の考察をつうじて『前掲誌』三四頁）。佐藤進一氏「中世史料論」（『前掲書』三〇〇頁）。

(30) 前述せるように泰時執権期には、評定での審議結果が評定事書として鎌倉殿へ報告され、その後に執権が下知状を作成したのであるが、経時執権期からは、政務が滞るとして、評定事書を提出することさえ行われなくなってしまう（追加法23条）。下文によって為される鎌倉殿からの安堵が、主従関係を確認するための形式的なものであったことは、「理非は安堵によらず」といった法諺からも伺うことが出来る。もし、安堵を受けた所領について提訴があれば、その理非が審理され、執権による判定（安堵状の有効性の判定）を仰がなければならなかったのである。

(31) 佐藤進一氏は『日本の中世国家』（前掲）一二四頁において「そもそも鎌倉幕府の体制では、將軍のもつ統治の機能は執権制によって受託代行された（その故にこそ執権は「政務の御代官」であった―沙汰未練書―）のに対して、將軍のもつもう一つの主従制的支配権は本来的に身分支配の機能である性質上、他者による受託代行になじまなければかりか、この権能を弱化、形骸化すれば、それは直ちに幕府を支える主従制（具体的には御家人制）を崩壊に導く危険を蔵していた。その意味で、將軍勢力と執権勢力との対立は鎌倉幕府の体制に根ざす抜きがたい矛盾であった」と述べられている。ただし、執権制

北条泰時の政治構想（長又）

度の開始直後から、將軍と執權の間に対立や緊張関係があったとは思われない。両者に対立が生まれるのは経時以降のことであった。

(34) これは頼朝が得た平氏没官領五百余箇所とは比較にならない膨大なものである。

(35) 安田元久氏『（人物叢書）北条義時』（吉川弘文館、昭和36年）二三〇頁。

(36) 松尾剛次氏『中世都市鎌倉の風景』（吉川弘文館、一九九三年）一〇〇―一六頁を参照されたい。

(37) 平安京では条坊制の一位として用いられた。即ち坊を四分割した区画であった。

(38) 戸主とは、都城における地割面積の単位で、間口五丈・奥行十丈（面積五十平方丈の地所）を一戸主とした。

(39) 松尾剛次氏は、鎌倉における丈尺制、戸主制の採用を嘉禄元年の宇都宮辻子への御所移転にともなうものであると指摘されている（前掲『中世都市鎌倉の風景』五八―六一頁）。

(40) 往阿弥陀仏が、泰時の強力な後援をうけ、遠浅の海岸に人工の築島Ⅱ和賀江島が築いた。この築港によって周囲は和賀江津、飯島津と呼ばれる様になり、物資の陸揚げ港となった。中国からの輸入品も多数ここから陸揚げされた（『吾妻鏡』貞永元年七月十二日・八月九日条）。

(41) 当然のことながら、これまでも將軍御所の警備は御家人役として課されてきた。その変遷を五味克夫氏は次のように述べておられる（同氏「鎌倉御家人の番役勤仕について」（二）『史学雑誌』第63編第10号、一九五四年、二十二頁）。

頼経の下向以前、御家人はすべて（西）侍に祇候していたのであるが、新將軍の下向に及んで（東）小侍に移り、（西）侍は一時無人の如き状態となったので、嘉禄元年には西侍、東小侍と夫々勤番者を定め、西侍は諸国交代勤番の御家人の待するところとし、東小侍は「可然人々」の待するところとしたのであり、諸門警固役の如きは前者に於て勤仕させることになったのである。そしてこの西侍の勤番役を「号大番之」した訳である。

(42) 五味克夫氏によれば、東国御家人の場合は、鎌倉大番役のみならず京都大番役も課されていたという（同氏「鎌倉御家人の番役勤仕について」（二）『前掲誌』、二十四頁）。

(43) 実朝將軍期に北条義時が侍所別当和田義盛を滅ぼして、その後任に就いて以来、侍所別当職は北条氏の手に戻っていた。義時から泰時に別当職が譲られた際に、次官である所司には四人の有力御家人が任ぜられているが、これは、侍所機構を北条氏が掌握しているという批難を避ける為であったと推測される。この四人の所司には職務が割り振られており、当時の侍所

の主たる職掌が窺えるのである。即ち、二階堂行村と三浦義村は「御家人の事を奉行」し、大江能範は「御出已下御所中の雑事を申し沙汰」し、伊賀光宗は「御家人の供奉所役以下の事を催促」した（『吾妻鏡』建保六年七月二十二日条）。そして承久元年に、頼経が東下してくると、大江能範と伊賀光宗が分担した職務が特化され、小侍所が置かれた。遅くとも天福二年（一二三四）頃までには、北条氏の被官（平盛綱）一人が侍所の所司を独占するようになっていたので（細川重男氏『鎌倉政権得宗専制論』一五二頁）、小侍所が新設される頃に、侍所所司＝北条氏被官体制が出来上がったと考えてよいのではないだろうか。

(44) 川添昭二氏『日蓮とその時代』第六章「中世の儒教・政治思想と日蓮」（山喜房、平成11年、二五三頁）。

(45) 『吾妻鏡』元仁元（一二二四）年十二月二十六日条を初見とする。陰陽道の祭祀で、鬼気を祓うことを目的とした。このときは、御所の四隅と、鎌倉の四つの境界である六浦（東）、小坪（南）、稲村ヶ崎（西）、山内（北）で行われた。

(46) 『吾妻鏡』貞応三（一二二四）年六月六日条を初見とする（条文にも「此御祓。関東今度始也」とある）。これも陰陽道の祭祀である。このときは、將軍の様々な災いを負わせたヒトガタを七人の使いに命じて、霊所である七箇所（由比ヶ浜、金洗弁沢池、固瀬河、六連、狹河、杜戸、江嶋の龍穴）において祓いを行わせた。

(47) 松尾剛次氏前掲『中世都市鎌倉の風景』二三～二七頁。

(48) この連歌については、大谷雅子氏『和歌が語る吾妻鏡の世界』（新人物往来社、平成8年）一一五頁に解説がある。

(49) 注（16）を参照されたい。

(50) 貞永元年に將軍頼経が従三位に叙せられ政所の開設資格を得た。

(51) 村井章介氏や五味文彦氏が既に指摘されている様に（村井氏「執権政治の変質」『前掲書』一五〇頁、五味氏「執事・執権・得宗」『前掲書』二〇三頁）、幕府が貞永式目制定以後、度々発令した不易法からも執権の役割をうかがい知ることが出来る。不易法とは、再審請求の期限を定めることで、当知行者の權利を擁護し、在地の秩序の安定を図るものであった（拙稿「御成敗式目の効力をめぐって」『法史学研究会会報』第9号、二〇〇四年）。貞永式目では、源家將軍三代と政子（頼経の後見役）の御成敗が不易化されたのであるが、それ以後の不易法は、正嘉二年（一二五八）に泰時の成敗が不易化されたのを皮切りに執権在職期間を基準として発令されている。そこには、鎌倉殿ではなく執権が幕府の「御成敗」の主体となっていたことを示す意味があった。法文中に、執権を御成敗の主体と明示することは、すでに泰時の次代執権経時の頃から確認出来

るのであるが、『中世法制史料集第一巻鎌倉幕府法』「寛元元年八月二十六日付追加法二二一条」岩波書店、昭和三十年、一四六頁）、この泰時の成敗の不易化は、泰時の後継者による所為であり、泰時自身の意思とはまったく無関係であることに注意すべきである。

(52) 仁平義孝氏は、この決定により「訴訟を中心とする評定会議に関する権限は、完全に執権の掌握するところとなり、將軍は一切関与できなくなったのである」と評価されている（同氏「執権政治期の幕政運営について」『前掲誌』一五一頁）。

(53) 後の事例であるが、執権就任間もない若年の執権時頼が、六波羅探題の重時を連署とする為に鎌倉に呼びもどそうとした際にも、時頼は「短智ノ一身軍營ノ政ヲ扶ケテ、スコブル自専セザルコトヲ怖畏ス。六波羅ノ相州ヲ招キ下シ。万事ヲ談合セシメント欲ス。コレ日ゴロノ所存ナリ」と述べたと『吾妻鏡』寛元四年九月一日条は伝えている。しかし時頼のこの提案に対し、有力御家人たる三浦泰村は反対の意向を示したと同条は記している。おそらく三浦泰村は、北条氏による支配体制が強固となることを怖れたのであろう。翌年、三浦一族が時頼を除かんと挙兵した事はよく知られている。なお幕府職制上の二人制については、佐藤進一氏が『日本の中世国家』（前掲）一二二頁において、「原理的には、二名の協議は合議制の最小単位であるから、合議制のもつ長所に数えられる判断の公正、穩健や独創的傾向の制御などは、そのまま二人制にも適合するわけだが、二人制の場合には、相互監視（牽制）及び多人数の合議制いは求めがたい責任の明確化が大きな効用として認識されたのではあるまいか」と述べられている。

(54) 当該期に発給された政所下文や下知状の署判をみると、叔父時房の方が泰時より上位に署判を加えている（毛利一憲氏「鎌倉幕府將軍家下文について―貞永式目の研究―」『北見大学論集』第8号、昭和57年、二八頁）。

(55) 鎌倉幕府における最も重要な儀式として坩飯献儀を挙げることが出来る。これは正月の三箇日に重臣が將軍を饗応する儀式であったが、誰がこの沙汰人に出されるのか毎年注目されていた。なぜならばこのときの沙汰人三人が、そのまま幕府の地位を示すものであったからである（元旦沙汰人が最上位であり、三日目の沙汰人が第三位ということになる）。最初にこの事に着目されたのは八幡義信氏で、坩飯献儀の内容及び沙汰人が制度化されるのは承久の乱以降の事であると指摘されている（同氏「鎌倉幕府坩飯献儀の史的意義」『政治経済史学』85、一九七三年）。泰時執権期に元旦の沙汰人をつとめたのは、叔父の時房であり（ただし嘉禄二年と翌三年は泰時が元旦沙汰人をつとめている）、泰時は二日目の沙汰人をつとめた（時房は病没するまで元旦沙汰人をつとめた）。

(56)『荀子』性惡篇に「孟子曰。人之性善。曰。是不然。凡古今天下之所謂善者。正理平治也。所謂惡者。偏險悖乱也。是善惡之分也」とある。すなわち、荀子のいう「惡」とは、「秩序が与えられず、人間が道德規範を遵守しないことであつた」(内山俊彦氏『荀子』講談社学術文庫、一九九九年、一二四頁)。

(57)やはり『荀子』性惡篇に「枸木必将待鑿括烝矯。然後直。鈍金必将待礪厲。然後利。今人之性惡。必将待師法。然後正。得禮儀。然後治。今人無師法。則偏險而不正。無禮儀。則悖乱而不治。古者聖王以人之性惡。以為偏險而不正。悖乱而不治。是以為之起禮儀制法度。以矯飾人之情性而正之。以擾化人之情性而導之也。使皆出於治。合於道者也」とある。参考までに集英社の全釈漢文大系本第八卷『荀子 下』(昭和四十九年、一三二頁)の当該部分の通釈を記しておく。

曲がつた木は必ずため木をあてたり火で蒸して柔らげてはじめてまっすぐになり、鈍い刃物も必ずといしにあててみかくことによってはじめて鋭利になる。同様に人間の本性も悪いものであつて必ず先生の教化を受けてはじめて矯正され、礼儀の規制を受けてはじめて人格も治まるのである。もし仮に、先生の教化がなかったら、その人間は偏つて陰險不正なものとなり、礼儀の規制をうけなかったらその人間は道理に背いた行いをして人格も破綻する。昔、聖王は人間の本性がこのように悪いもので、これを放置しておけば偏つて陰險不正なものとなり、道理に背いた行いをして人格も破綻してしまうことを思い、そこでこの事態から人間を救うために、礼儀を作り法制を定めてそれを通して人間の性情を矯正して正常なものとし、また、人間の性情を礼儀や法制になじませてよい方向へ向かうように指導した。これらの措置はすべて人々の人格を育成し、また道理にかなうようにさせるためのものであつた。

(58)「礼」に関して、荀子は「議兵篇」において「礼なる者は治弁の極なり、強固の本なり、威行の道なり」(礼は政治の極致であり、国を強固にする基本であり、權威が行われる方途である)と述べている(内田俊彦氏訳、『前掲書』一四五頁)。あるいはこの語が秦時にとっての金言であつたのかもしれない。

(59)『神皇正統記』「後嵯峨」条に「凡保元・平治ヨリコノカタノミダリガハシサニ、頼朝ト云人モナク、秦時ト云者ナカラマシカバ、日本國ノ人民イカバナリナマシ。此イハレヲヨクシンラヌ人ハ、ユエモナク、皇威ノオトロホ、武備ノカチニケルトオモヘルハアヤマリナリ」とある(前掲岩波日本古典文学大系本一六三頁)。